



Title	自然談話研究におけるObserver's Paradox に関する 考察 : 女性多人数会話の継続・縦断調査を事例に
Author(s)	児島, 麦穂
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 41- 50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88412
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自然談話研究における Observer's Paradox に関する考察 —女性多人数会話の継続・縦断調査を事例に—

児島麦穂

1. はじめに

これまで「自然談話」、「日常談話」、「雑談」、「ordinary talk」は、社会言語学において研究対象となってきた。これらは授業、裁判、メディアの報道といった「制度的な会話」とは異なり、会話において特定のタスクが定められていない、制度による制限がない (Drew and Heritage, 1992)、参加者らの自由参加が認められる (Levinson, 1983)といった特徴が挙げられる。このような自然談話は、人間関係を構築・維持すること、また会話そのものを楽しむことを志向しており、ことばの交感的機能 (phatic communication) (Malinowski, 1923)を持つことが明らかになっている (村田・井出, 2016)。しかしながら研究倫理上、会話データの録音・録画をする際には事前に会話参加者の同意を得ることが不可欠なため、会話参加者らは収録されていることを認識しており、自然会話とは言い難いのではないかという批判も存在する。このような、収録や研究の存在が会話データに影響することは避けられないといった現象は Labov (1972)により Observer's Paradox と呼ばれており、どのような条件の談話を自然談話とするのか、またどのように自然談話をデータとして収録するか、といった議論が行われてきている。これに対し Mondada (2006, 2012)は、実際にビデオカメラやマイクの存在は会話に影響しているため、これらのデータはただの「会話」でなく、「収録された会話」として扱う必要があるとしている。さらに参加者らがカメラを意識しているかどうかは、会話場面ごとに分析することが可能であるため、収録および分析方法を洗練させることで自然談話を研究対象とすることができると主張している (Mondada, 2006: 12)。

本研究では、筆者が 2018 年から継続・縦断調査として自然談話の収集を目的に録音・録画した 20 代女性らの多人数会話の中から、カメラや研究の存在が影響していると思われる場面を抽出し、それらの場면을 Goffman (1981)の参与枠組みの概念を用いて談話分析する。具体的には、①会話参加者らがどのような場面で研究や収録機材を意識し、またそれらをどのように話題にしているのか、②参加者らは誰をオーディエンスとして想定し会話を行なっているのか、そこに研究者は含まれているのかを明らかにする。最終的に、Mondada (2006)による「カメラを意識しているかどうかは、会話場面ごとに分析することが可能である」か否か、そのような手法が有効であるかについて論じ、自然談話の収録および分析についての議論を深めることが本稿の目的である。

2. 先行研究

本章では社会言語学の先行研究において、Observer's Paradox を解決するためにどのような議論が行われてきたか、また会話参加者らに収録や研究の存在を意識させずに自然談話を収録するためにどのような工夫がされてきたかを見ていく。会話参加者の日常場面での話し方を解明しようとする研究において、自然談話を分析する手法として以下のような主張が行われている。まず、Labov (1978)は参加者らが収録以前から知り合いであれば、形式ばっていない仲間内での会話が行

なわれることが予想されるため、自らの話し方への注意は薄れ、収録を意識して話し方をコントロールしようとする可能性は低くなるとしている。Milroy (1980)は、収録開始直後は収録されていることが強く意識されており、収録開始から時間が経過することで参加者は収録を徐々に意識しなくなる傾向にあるとしている。また、Bell (1984)は「オーディエンス・デザイン」モデルを提唱し、発言を誰が聞いているのか、もしくは誰が聞く予定なのかによって変化するスピーチスタイルについて分析している。これを元に Wilson (1987)は、研究者がオーディエンスとして想定されている現象を *researcher as audience* を呼び、収録が会話に影響しているケース(*tape-affected speech*)を以下のように挙げている。

(1) Direct tape-affected speech

レコーダーのスイッチが入っているか、カメラの位置が適切かなど、直接的に収録機材に言及する。収録されていることが判明した場合、会話参加者は話し方を変える可能性がある。

(2) Personalized tape-affected speech

撮影機材が承認参加者(Goffman, 1981)として認識されるケース、つまり撮影機材を会話の場にはいないが録音・録画を後に見るであろう研究者などに見立て擬人化し、それらに直接話しかけるような行為。

(3) Formal tape-affected speech

罵り(*swearing*)など、フォーマルな場に相応しくない特定の語彙を使わないようにする、もしくはそのような語彙を使ったものを嗜めるなど、収録をフォーマルな場と捉える行為。

(4) Informal tape-affected speech

参加者間でのからかいの一種として、当人(参加者の1人)が恥ずかしがるような内容をあえて収録中に話させるなどといった方法で収録を意識する行為。

(Wilson, 1987: 175)

このようなケースを考察し、Wilson は *Observer's Paradox* を完全に解決することは不可能であると結論づけ、社会言語学の研究において自然談話を扱うためには収録方法に注意を払う必要があると述べている。特に研究結果が、収録の状況や研究の存在によって作り出されたものではなく、会話という状況下で(収録に影響されず)発生したものであるかどうか見極める必要があると論じている。

上記の(2)では、撮影機材が Goffman (1981)のいうところの承認参加者となりうると述べられているが、研究者が積極的に会話に参加し、またその発言も分析対象となるアクティブ・インタビュー(Gubrium, 1995; 桜井, 2002)の手法でデータを収集した秦 (2017)は、会話場面において意識される収録後に観察する者の存在を「関与観察者」と呼んでいる。秦は、会話参加者が話題に上がっている人物の匿名化を行なう様子や、収録の言及と共に自らの発言が差別的に受け取られないようにフォローをする様子を、後に会話がビデオで観察されることへの配慮や用心であると分析し、「関与観察者」を「関与することを否応なく意識されてしまっている者」(秦, 2017: 149)と定義づけている。またその中で、参加者は収録された会話においてその場にいる他の参加者に向けて発言を行なうと同時に、収録後に観察する研究者も意識しており、多層的なオーディエンス・デザインを行なっていると考察している。他にもドラッグクイーンが化粧や衣装などを身に着け

る過程でどのように話し方を変化させるのかを社会音声学的に分析した Calder (2018)では、撮影機材を小型化することで Observer's Paradox を最小限にする工夫がなされている。

このように、自然談話を対象とする研究において収録、研究、研究者の影響及び存在をどのように扱うか、Observer's Paradox とどのように折り合いを付けるかは多様に論じられてきたものの、どのような収録及び分析方法が適切であるかの明確な答えはなく、未だに議論の余地があると言える。本研究で扱うデータでは、参加者らは収録以前からの友人同士であり、Labov (1978)により収録が意識されづらいとされている仲間内での会話である。また、Milroy (1980)が述べたように収録開始からの時間経過の他にも、何度目の収録であるか、どのような環境で収録が行われたかといった情報も、参加者の収録への意識に影響を与えると予想される。そのため、次章 3.2 節においてこのような情報も含めデータについて説明する。また、本研究で扱うデータにおいて収録が意識されているかどうかの指標の 1 つとして Wilson (1987)を参考に分析を行い、どのように収録が意識されているかについて論じていきたい。

3. 研究方法

3.1 分析枠組み

本研究では Goffman (1974, 1981)の参与枠組み(participation framework)の概念を用いて、データの分析を行なう。Goffman は社会相互行為としての会話における、人々の参与の状態を参与地位として整理し、まず発言を行なっている「話し手」と、発言を聞いている「受け手」に分けている。

「受け手」は、「承認参加者」と「未承認参加者」に分けられ、承認参加者には、話し手が直接話しかけている宛て手と、会話に参加することが認められているものの直接話しかけられているわけではない非宛て手が存在する。未承認参加者には、側聞者、漏聞者、盗聴者が存在する。しかしながら、実際に誰に対して発言を行なっているのかは明確にし難いことを指摘した Clark & Carlson (1982)は、この枠組みに「傍参加者 (side-participant)」という役割を提案した。傍参加者とは承認参加者に含まれ、話し手が宛て手以外の参加者（非宛て手）に対して発話行為を行う場合に、間接的に発話行為の対象としている存在のことである。

つまり会話参加者が誰に向けて、また誰に聞かれることを意識して発言を行なっているのかは、状況によって柔軟かつダイナミックに変化すると言える。参与枠組みは発言のみではなく、その場のコンテキスト（参加者らの持つ社会的・文化的知識や規範、周辺環境要因など）が影響して設定されるのである。本データにおける、収録や研究、また研究者の存在はこのような環境要因の一部であると言える。先述したように秦 (2017)では、収録後に会話を観察する研究者などの存在を、その場の会話に直接参与することができないものの「関与することを否応なく意識されてしまっている者」(秦, 2017: 149)として「関与観察者」と呼んでいる。これらを参考に本研究では、会話参加者らの発言において参与枠組みがどのように設定されているのかを分析することで、いかに研究や収録の存在が意識されているのかを明らかにしていく。

3.2 データについて

本研究では、筆者がのべ 30 名の 20 代女性を対象に 2018 年から継続・縦断調査として収集して

きた多人数会話のうち2件をデータとして紹介する。継続・縦断調査は、友人同士の会話において笑いがどのような機能・性質を持つのか、また彼女らの社会的・文化的規範がどのように笑いを含む相互行為において表出するのかを解明することを目的としている。収録は同じ参加者らを対象に年に一度行われている。このような調査の目的、特に会話が笑いに注目して観察されることは、参加者らにある程度認識されている。これは、研究への協力依頼を行なった際の説明と収録開始前に参加者らが署名した同意書を通して伝えられているほか、参加者らが筆者の個人的な友人であることが理由である。収録の際、筆者は退室しているため会話には参加しておらず、会話の内容についても一切指示などを行っていないため、基本的には会話の流れに沿って参加者らにより決められている。収録の機材については、2018年3月の収録ではハンディカメラ1台、iPad1台を三脚に設置して録画、iPhone1台をテーブルに置いて録音がされている。2019年7月の収録では、ハンディカメラ1台、小型のアクションカメラ1台を三脚に設置して録画、iPhone1台をテーブルに置いて録音がされている。その他の参加者に関する基礎情報は以下の表の通りである。

表1. データ1の会話参加者の基礎情報

会話参加者	収録日	収録場所	性別	職業	収録への参加回数	備考
AP	2018年 3月10日	筆者が東京に滞在した際のホテルの1室。	女性	会社員	1回目	関西の高等学校での同級生であり、収録時点では全員東京に在住している。
EH						
KK						

表2. データ2・3・4の会話参加者の基礎情報

会話参加者	収録日	収録場所	性別	職業	収録への参加回数	備考
KF	2019年 7月8日	大阪のカフェの個室。	女性	会社員	同じメンバーとの参加ではないが、全員が2度目の参加	関西の高等学校での同級生であり、収録時点では関西に在住している。
YI						
MT						
NW				無職		同様に高等学校での同級生。タイ在住。

4. 分析結果

4.1 カメラに話しかける参加者たち

本節では、会話参加者らが直接カメラに向かって話しかける様子が観察された2つのデータを紹介し、会話の中で誰がオーディエンスとして想定されているのかを分析していく。データ1では大学進学をきっかけに5年前から東京に住んでいたAPが、就職により1年前に引っ越してきたKKとEHに1年間東京で生活した感想を尋ねている。データと共に収録開始からの経過時間を以下に示す。

データ 1 (6:56-7:28)

- | | |
|-----------------------------|------------------------------------|
| 14. AP: どうでした? | 24. EH: [hahaha |
| 15. KK: どうでしたか? うんでも楽しいかも | 25. AP: ¥1 年間同士¥= |
| 16. (. 6) | 26. KK: =¥急になんか: カメラ [あるやんみたいな¥ |
| 17. AP: お | 27. AP: [((カメラを見る)) |
| 18. (. 7) | 28. KK: [¥真面目になるやんみたいな¥ |
| 19. KK: 普通に人多い | 29. AP: [¥さあ皆さん¥huhu(. 3) 今から説明する- |
| 20. AP: お(. 8) 意見(.) 交換しよ | 30. [((カメラに向かって)) |
| 21. (. 7) | 31. KK: カメラ目線やめ: |
| 22. KK: ¥急にディスカッション始 [めるやん¥ | 32. AP: hahaha |
| 23. AP: [haha | |

この場面で参加者らは 1 年間の東京生活について話しており、20 行目の AP の「お(.8)意見(.)交換しよ」という沈黙を伴いながらの発言が、その後の笑いを含むやりとりのきっかけとなる。20 行目の AP の発言を聞いた KK は、「急にディスカッション始めるやん」(22 行目)、「急になんか: カメラあるやん(中略)真面目になるやん」(26, 28 行目)と、その不自然さを笑いながら指摘し、撮影機材についての意識を明らかにする。Wilson (1987)はこれに類似する収録への言及が行われている事例を分析し、自然談話において話題は参加者間でのその場の交渉により決定されるものであるため、参加者が話すべき内容を直接的にコントロールしようとする行為が不自然であるとしている。収録の存在により参加者らは会話を進行させる必要があるとプレッシャーを感じ、直接的に話すべき内容を選択するという収録外の自然談話では見られないような行為に繋がるという。つまり、「お(.8)意見(.)交換しよ」(20 行目)という発言は、AP が会話を継続するために行なった不自然な話題の提案であったと言え、それに気がついた KK が「カメラの前で真面目に会話を行おうとしている AP」へのからかいを行なったと言える。また参与枠組みの観点から整理すると、この 20 行目の発言において AP は形式上はその場にいる KK と EH を直接の宛て手として話題の提案をしつつ、実際は収録後に会話を聞く者である研究者の存在を「関与観察者」としてより強く意識していたと言える。対して、その後の KK によるからかいは関与観察者としての研究者の存在を認識しつつも、その場にいる AP を直接の宛て手として、彼女の発言の不自然性を指摘しているのである。

その後、自らの収録への意識に関してからかいを受けた AP はカメラに視線を向け(27 行目)、「さあ皆さん」(29 行目)と話しかける。これは KK のからかいに便乗した AP がおかしみを構築するために、カメラ越しのオーディエンスに向けて語りかけるような演出を行なった、笑いを志向する行為であると言える。つまり、メディアなどで芸能人がインタビューを受ける様子を真似ているのである。そのため、ここで AP が話しかけているのは、後に録画を観察する研究者というよりも、笑いを志向するための演出における架空のオーディエンスであると言える。つまり「皆さん」という語りかけは、収録されているという状況を遊びの要素として用いたパフォーマンスであり、実際のところその宛て手と一緒に会話を楽しみ笑いを共有している他の参加者であると言える。

このようにデータ 1 では、AP が研究の存在を意識して提案したと思われる「意見交換」(20 行目)が、KK によりその不自然性を収録機材の存在と関連づけられ、直接的なカメラに関する言及に至っていた。それが、参加者間でのおかしみを構築する遊びのきっかけとなり、AP があたかも

カメラの向こう側に不特定多数の「皆さん」(29 行目)がいるかのように話しかけるという行為に繋がっていた。その中で参与者らはオーディエンスとして、その場にいる他の参与者（直接の宛て手）、収録後に映像を観察する研究者（関与観察者）を同時に想定するだけでなく、その場にあるカメラを利用して架空の聞き手「皆さん」を構築し、それらをどのように意識するかは発言ごとに変化していた。

データ 2 は別の参与者らによる 2019 年 7 月の収録である。ここでは収録前に署名をした同意書が 1 枚カフェのメニューに挟まれてしまっていることが発見され、それをきっかけに彼女らは収録に影響された会話を行なう。またデータ 1 同様に、カメラに向かって話しかける様子も観察された。

データ 2 (17:00-17:20)

- | | |
|--|--------------------------------------|
| 57. NW: ((視線を下に落とし YI の書類を見つける)) | 67. MT: ¥MT もう入れたもん¥ |
| 58. ねえ誰かなんか¥挟んでるって¥ | 68. YI: hahaha |
| 59. YI: haha[hahaha | 69. NW: わる: |
| 60. [((手を叩きながら)) | 70. YI: ¥やばいやばい¥ |
| 61. NW: [¥絶対 YI [やって¥ | 71. MT: ¥わる¥ |
| 62. MT: [ahaha | 72. KF: ¥()¥ |
| 63. NW: [¥絶対 YI¥ | 73. NW: ¥カメラに向かって[謝って¥ |
| 64. KF: [haha | 74. YI: [ehehe |
| 65. NW: ¥()ってたもん¥ | 75. [¥すいませんでした¥ |
| 66. YI: hahaha | 76. [¡((カメラを見て頭を下げる)) |

57 行目でメニューに挟まれた同意書を発見した NW は、「誰かなんか挟んでる」(58 行目)、「絶対 YI」(61 行目)と発見した同意書は YI ののものであると笑いながら指摘する。名指しされた YI は手を叩きながら笑いで反応している(59, 66, 68 行目)。続いて YI が同意書の管理を怠ったことに関して、NW と MT が「わる」い(69, 71 行目)と評価し、さらに NW が「カメラに向かって謝って」(73 行目)と言うと、YI は「すいませんでした」(75 行目)とカメラに向かって笑いながら謝罪をしている。ここでの参与枠組みを整理すると、同意書の管理を怠った YI の行動を指摘し、それを悪いと評価した NW と MT の発言、またカメラに向けて謝るように指示する NW の 73 行目の発言は、その場にいる参与者ら、特に YI を直接の宛て手としているものの、後に録画を観察する関与観察者としての研究者を意識したものであると言える。その後の YI による謝罪は、収録後に映像を観察する予定であり、同意書を用意した研究者に向けて行われている。つまり研究者は、この場にはいないもののこの謝罪の直接の宛て手であり、これは Wilson (1978)の言うところのカメラを擬人化し承認参与者として捉える *Personalized tape-affected speech* である。このように気軽に研究者を扱っている要因の 1 つとして、研究者が参与者らと友人関係にあることも挙げられるだろう。

データ 1・2 では会話参与者らは発言によって柔軟にオーディエンス・デザインを行なっていたと言え、その中でその場にいる直接の宛て手としての他の参与者と関与観察者としての研究者の存在を同時に意識していた。また、彼女らは収録されているという状況を用いて、笑いを志向する相互行為を行ない協働的におかしみを構築していた。笑いを共有し、会話を楽しもうとする行為は雑談や自然談話の特徴として挙げられている(村田・井出, 2016)。収録の目的が笑いの分析であることを参与者らが認識していたことを考慮すると、彼女らが研究の目的に合わせて笑いが発生するように意識していた可能性は捨てきれない。しかしながら、2 つのデータで観察された笑

いは、話題の不自然な提案や同意書の管理不足への指摘をきっかけとして、即興的に会話の場で発生していたと言える。そのため、収録の存在がなければこのような会話は起こらなかったため収録の影響を受けていると言えるが、会話を友人同士で楽しもうとする自然談話の要素は収録への意識が表面化した場面であっても健在であると言えるのではないだろうか。

4.2 話すことを拒否する参与者たち

本節では、近況を尋ねられた参与者らが話すことを拒否する場面を観察し、なぜ拒否したのかそこに収録の存在がいかに関わっているのかを分析する。データ 3 は、データ 2 の少し前の場面であり、参与者らがそれぞれ現在交際している相手がいるのかなど近況を順番に語る中で、NW が KF の近況を尋ねている。

データ 3 (16:30-16:40)

- | | |
|----------------------------------|------------------|
| 41. NW: KF は? | 47. NW: [2hahaha |
| 42. KF: KF 今微妙やな: | 48. YI: [2hahaha |
| 43. NW: 彼氏- | 49. KF: 主旨とちゃう |
| 44. KF: でも [1 これ笑いが起きる話せなあかんねやろ? | 50. MT: hahaha |
| 45. [1 ((机の上にある同意書やカメラを指差しながら)) | |
| 46. MT: uhaha [2haha | |

41 行目での NW の「KF は?」という質問に、KF は「今微妙やな:」(42 行目)と答える。43 行目でさらに質問しようとする NW を遮って、KF は「でもこれ笑いが起きる話せなあかんねやろ?」(44 行目)と机の上にある同意書やカメラを指差すジェスチャー(45 行目)と共に述べる。ここでの 41 行目の NW による質問は KF を直接の宛て手としており、その後の KF も 42 行目では NW を直接の宛て手として回答を行なっている。対して、44 行目の KF の発言は、この会話が研究に使用される収録のためであることに直接言及されている。それを「～せなあかんねやろ?」とこの場にいる他の参与者に確認するという意味では形式上彼女らを直接の宛て手としているが、実際に KF が意識しているのは後に映像を確認する関与観察者としての研究者、またこの会話が笑いに注目した研究に使用されるという事実である。また、このような言及を行なった理由としては、KF が収録されている会話において自身のパートナーについて話すことを避けたかったため、もしくは自身の話が「笑いの研究」には相応しくない面白くない話であると判断したためであると考えられる。これは、49 行目 KF の「主旨とちゃう」という発言からも明らかである。つまり、KF は事前の説明により何を目的に会話が収録されているかを認識し、その目的に沿うように会話を行おうとある程度のプレッシャーを感じていたと考えられる。さらに、KF は「笑いの研究」という情報から、一般的に「笑い」が連想させるような楽しい会話を収録することが研究者の「主旨」だと捉えていることが窺える。このようにデータ 3 からは、参与者らが収録され後に分析されることを意識して会話の内容を選択し、また自らのプライベートな情報を共有するかを判断していることが観察された。また、テーブルの上に設置してあるカメラや同意書など、会話の場の空間的な要素も収録への意識に影響していた。データ 4 はデータ 3 から 14 分程度後の会話である。ここでも、自身の近況を尋ねられた参与者の 1 人が回答を拒む様子が観察されている。残念ながら、本場面では研究者が戻ってくることにより会話が途中で終了してしまっているため、実際にどのような理由から NW が回答を拒んだのかは情報が十分ではなく判断し難い。

データ 4 (30:52-31:03)

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 70. KF: NW はどうなん?: | 76. YI: [おかえり:] |
| 71. (.5) | 77. NW: [¥話すわまた¥ |
| 72. NW: へ | 78. KF: ¥ちょっとなんなん意味深まじ¥ |
| 73. ((研究者が部屋に戻ってくる)) | 79. MT: huhu |
| 74. MT: ¥おかえり:¥ | 80. KF: なになに:良いことあったん? |
| 75. KF: 終わった | 81. NW: (.3)¥ん:¥ |

このように、今度は KF が NW に対して 70 行目で近況を尋ねると、まず NW は「へ」(72 行目)、「話すわまた」(77 行目)と発言し、さらに KF が繰り返して問いかけると(78, 80 行目)、「ん:」(81 行目)と何度も答えをはぐらかしている。この会話だけでは NW が KF の質問の回答を拒否した理由が、部屋に戻ってきた研究者や収録の存在を意識してのことなのか、それとも友人である他の参与者にさえも答えたくなかったのかは判断できない。しかしながらタイ在住である NW はこの場面以外にも、次はいつ日本に帰ってくるのか、収録の少し前にタイでの仕事をやめたが次はどのような仕事をするのか、なぜ仕事をやめたのかといった質問を受けた際にも同様に「まあまた話すよ」と明確な回答を行なっていない。そのため、このような今後の予定が決まっていない自身の状況について、この場で詳しく説明することを拒んだのだと考えられる。実は、NW と友人である研究者は個人的に収録前に NW の近況や今後の予定について話を聞いている。こういった要素を考慮すると、NW がこのように回答のはぐらかしを行なった理由として、その場にいる参与者に自身の近況を共有したくなかった、友人としての研究者には共有したが研究に使われる可能性のある収録されている会話において近況を話すことは避けたかったという候補が挙げられる。よって、NW がデータ 4 において回答をはぐらかしている際に想定しているオーディエンスは、直接の宛て手としての他の参与者ら、そして関与観察者としての研究者であると言える。

このようにデータ 3 と 4 での会話では、参与者らが自らの情報を共有することを拒む様子が観察された。特にデータ 3 では直接的に収録の存在が、回答を避けようとした原因として言及されており、また KF は収録の目的である研究の内容から「笑いの起こる楽しい会話を行なうべきである」というプレッシャーを感じていた。データ 4 では NW の回答を拒否する理由が明確ではなかったものの、友人としての研究者との個人的な会話よりは NW が緊張感を持って発言を行なっていたことが窺える。つまり、収録という存在が多かれ少なかれ参与者らの会話に影響を与えていると言え、収録中の会話はこうであるべきであるという認識が表れている点においては、Wilson (1987)において収録をフォーマルな場として捉える *formal tape-affected speech* に近いケースであると言える。

5. 考察

本研究では分析したデータから、会話参与者らがカメラに向かって直接話しかける場面と参与者らが自らについて話すことを拒否する場面において、収録が会話に影響を与える様子が観察された。その中で Wilson (1987)が紹介した 4 つの収録に影響されるケースのうち、カメラを擬人化し承認参与者として話しかける *personalized tape-affected speech* と収録をフォーマルな収録の場として相応しい会話を行おうとする *formal tape-affected speech* に当たる要素が観察された。カメラへの意識が表面化したきっかけとして、データ 1 では不自然な話題の選択、データ 2 では同意書

などの空間的要素、データ 3, 4 では自らに関する情報共有の拒否であった。データ 1 と 2 では、参加者らが相互行為内で遊びを行い笑いを共有する過程において、カメラの存在が遊びの道具となっていた。また、どの場面においても収録されているという状況において参加者らは、何らかの会話、特に「笑いが発生するような楽しい会話を真面目に行なう」必要があるというプレッシャーを感じている様子であった。このことから、本データではその場にいる参加者同士を直接の宛て手としつつ、同時に後に録画を確認する関与観察者の存在がオーディエンスとしてほぼ常に意識されていたと言える。

本研究で分析したデータ 1・2・3 では、カメラや研究への直接的な言及があったため、研究の存在が会話に影響を与えていることは明らかであった。しかしながら、データ 4 で NW が自分の近況を詳細に語ることを拒否した理由に、研究の存在が関係しているのかは会話データのみの分析からは判断し難かった。よって、参加者らが研究を意識して会話を行なっていることが明らかな場合もあると言えるものの、それらにおいてもその場にいる参加者と、後に映像を確認する関与観察者としての研究者が同時に意識されていた。つまり、収録への直接的な言及が行なっていない場面においても、参加者らは関与観察者として研究者を意識しているのではないと思われる。その意識が直接的にカメラに関して言及する際や、参加者の 1 人による不自然な話題の選択といった行為により表面化するのであり、収録や研究に対しての意識が完全に消えることはないのではないかと考察できる。しかしながら、どのような発言が不自然であるのか、その不自然性が研究に起因するものなのかは結局のところ判断が難しい。これにより、Mondada (2006) による「カメラを意識しているかどうかは、会話場面ごとに分析することが可能である」という説はある程度証明されたものの、だからと言ってそれらの場面以外の会話がカメラの影響を受けていないとは言い切れない。自然談話をデータとするにあたり、カメラの小型化や参加者らの関係性、研究者と参加者らの関係性、収録場所、収録時間などを工夫することにより、収録や研究が意識されづらくすることは可能であると言える。それに加え、分析段階においてもデータは「収録された会話」として扱われるべきであり(Mondada, 2006)、一見自然な会話に見えても収録や研究の存在が会話に影響を与えている可能性には常に注意を払う必要がある(Wilson, 1987)ということが本研究の事例からも明らかになった。

6. まとめ

本研究では、自然談話における Observer's Paradox に注目し、20 代女性らの多人数会話においてどのように収録や研究の存在が意識されているのかを Goffman (1974) の参与枠組みの概念を用いて分析した。また、これに秦 (2017) が提案した「関与観察者」という参与地位を用いることで、会話参加者らがその場にいる他の参加者を直接の宛て手とするだけでなく、同時に関与観察者としての研究者を意識し(時にカメラを通して研究者を直接の宛て手とし)、多層的にオーディエンス・デザインを行なっている様子を分析することができた。自然談話研究を行なうためには、Observer's Paradox として研究の存在が会話に影響を与えている可能性は常に考慮されるべきである。収録されたデータの詳細な観察だけでなく、フィールドワークとして研究者が会話参加者との関係性を構築し、収録外における参加者らの様子を観察することで、彼ら／彼女らの相互行

為をより深く捉えることができる。また、より多くのデータを扱うことにより、どのような状況で参加者らが収録を意識しやすいのかは明らかにすることができる。これを元に小型カメラの使用や同意書の管理、研究についてどの程度参加者に事前に伝えるのかなどを含め、参加者が収録を意識しづらい環境を構築することは可能であろう。このような工夫を行ない、収録による会話への影響を考慮し、それがどのように影響を与えているのかを分析に組み込むことにより、「収録された会話」としてではあるが自然談話の研究は遂行することができると言える。

参考文献

- Bell, A. (1984). Language style as audience design. *Language in society* 13, 145-204.
- Clark, H., Herbert. & Carlson, B., Thomas. (1982). Hearers and speech acts. *Language* 58 (2), 332-373.
- Calder, J. (2018). The fierceness of fronted /s/: Linguistic rhematization through visual transformation, *Language in society* 48, 31-64.
- Drew, P. & Heritage, J. (eds.) (1992) *Talk at work: interaction in institutional settings*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, E. (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Cambridge: MA: Harvard University Press.
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 秦かおり. (2017). 対立と調和の図式 –録画インタビュー場面における多人数インタラクションの多層性. 片岡邦好・池田佳子・秦かおり (編), コミュニケーションを枠づける 参与・関与の不均衡と多様性. 131-153. くろしお出版.
- 村田和代・井出里咲子 (2016). 雑談の美学: 言語研究からの再考. 東京: ひつじ書房
- Labov, W. (1972). *Sociolinguistic patterns*. Pennsylvania: University of Pennsylvania Press.
- Labov, W. (1978). *Field methods used by the research project on Linguistic change and variation*. Mimeo. University of Pennsylvania.
- Levinson, S. (1983). *Pragmatics*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- Malinowski, B. (1923). The problem of meaning in primitive languages. In C.K. Ogden and I.A. Richards, (eds.) *The meaning of meaning: A study of the Influence of Language upon Thought and of the Science of Symbolism*, 296-336. New York: Harcourt, Brace & World Inc.
- Milroy, L. (1980). *Language and social networks*. Oxford: Blackwell.
- Mondada, L. (2006). Video recording as the reflexive preservation-configuration of phenomenal features for analysis, In H. Knoblauch, B. Schnettler, J. Raab, H. Soeffner, (eds.) *Video Analysis: Methodology and Methods: Qualitative Audiovisual Data Analysis in Sociology*, Bern, Lang.
- Mondada, L. (2012). The conversation analytic approach to data collection. In J. Sidnell and T. Stivers (eds.), *The handbook of conversation analysis*, 32-56. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Wilson, J. (1987). The Sociolinguistic paradox: Data as methodological product, *Language and communication* 7 (2), 161-177.

トランスクリプト記号

[オーバーラップ記号	¥¥ 笑いながらの発話	, 音節の区切り
(.) 0.2 秒以下の沈黙	(()) ジェスチャー	? 質問
(0.0) それ以上の沈黙	: 長音	() 不明瞭な発話
- 言い淀み	= 続けて聞こえる発話	